



公衆衛生看護学研究会の活動報告：学術活動

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2025-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 香子, 阿久津, 和子, 鹿俣, 律子, 高崎, 千聡 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2002362

学 術 活 動

公衆衛生看護学研究会の活動報告

高橋 香子（地域・公衆衛生看護学部門）
 阿久津和子（地域・公衆衛生看護学部門）
 鹿俣 律子（地域・公衆衛生看護学部門）
 高崎 千聡（地域・公衆衛生看護学部門）

公衆衛生看護学研究会は、県内の保健師と日頃の活動を振り返りながら、ともに公衆衛生看護について考える機会として2018年より始まり、今年で7年目となる。途中、新型コロナウイルス感染症の発生により開催できない期間があったが、それ以外では年2回ほどのペースで開催している。その回によって新任期のみでの開催や、管理期まで誰でも参加できる回など対象を分け、自治体を超えた交流の機会となっている。今回は、これまでの開催の中から3回をピックアップし、活動内容を報告する。

表1 公衆衛生看護学研究会の内容

開催日	主な内容	対象	参加者数
2018. 9. 29	講話「新任期の皆さんに期待すること」とグループワーク (地域・公衆衛生看護学部門 高橋香子)	3年目までの保健師	20
2018. 12. 22	情報交換「現在の仕事内容、困ったこと、工夫していること」	1年目の保健師	10
2019. 1. 12	講話「新人・中堅期から求められる公衆衛生看護管理」とグループワーク (福島県立医科大学大学院医学研究科災害公衆衛生看護学講座 末永カツ子前教授)	新任期～管理期保健師	27
2019. 7. 27	事例検討「絵本を使ったグループワーク～個別支援を考えましょう～」 (宮城県七ヶ浜町 伊藤千賀保健師)	5年目までの保健師	13
2020. 3. 22	交流会「保健師同士のコミュニケーションについて考える」	新任期～管理期保健師	中止
2023. 3. 25	近況報告・情報交換	5年目までの保健師	5
2023. 12. 16	講話「男性保健師の会の活動」 (会津保健福祉事務所 湯田智仁保健師) 「市町村新任期保健師の仕事意欲を高めた先輩保健師の関わり」 (地域・公衆衛生看護学部門 高崎千聡)	新任期～管理期保健師	5
2024. 6. 22	講話「男性保健師の会の活動」 (会津保健福祉事務所 湯田智仁保健師)	看護師・保健師	17
2024. 12. 14	情報交換「新型コロナウイルス感染症禍での保健活動」	新任期～管理期保健師	12

第3回「新人・中堅期から求められる公衆衛生看護管理」

福島県立医科大学大学院医学研究科災害公衆衛生看護学講座 末永カツ子前教授から、「保健師本来の活動とは何か～地域に根差して地域に責任を持つ保健師活動とは」についての講話があり、それを受けて現場で困っていることやモヤモヤしていること、その対応のヒントについてのグループワークを行った。グループワークでは、参加者から「事務や業務に追われ、地区を意識した活動

ができていない」「自分なりに考えた対応がその課題に合っているのか確信が持てない」「できないと言えない」など多くの悩みが話された。これに対し、「職場でも積極的に話しかけあい、話しやすい雰囲気づくりを行うなど、普段からのコミュニケーションを大切にしよう」「事例を通して学ぶこと、地域の方と地域のことを話すことを大切にしよう」などの対応のヒントも話し合われていた。

【参加者の感想】

- 「保健師とは」について考える機会となり、大事なものを振り返ることができた。心に響くものがたくさんあり、参加してよかった。辛いと思うことも多々あるが、仲間をつくって乗り越えていきたいと思った。
- 新任期、中堅期、そして管理期のそれぞれの悩みやモヤモヤを聞いて、同じく悩んでいるということが分かった。仕事に追われて自分のありたい姿を見失いがちだが、もう一度見つめ直し、仕事が楽しくなるようにしたいと思った。若い人が元気に働けるように、自分のできることを一つひとつ丁寧に行っていこうと思った。
- 自分は何ができるか、何をしなければならないのかばかりを考えていて、退職まで続けていく気力がないと感じていたが、“やりたいこと”それを見出していこうと思った。若い後輩たちにも伝えたい言葉をたくさんいただいた。
- 日常業務の中では、なかなか振り返りができず、モヤモヤしていたところを、新しくつながることができた保健師仲間と共有できて良かった。今日からまた元気を出して頑張れそうだった。
- 日々の業務で感じる悩みを素直に話せてよかった。気さくに話し合うことができ、明日からの自分の姿勢のヒント、心構えになった。一緒に働く保健師や他町村の仲間とも語り合い、共有しあうことを今後大切にしていきたいと思った。



第4回「絵本を使ったグループワーク～個別支援を考えましょう～」

宮城県七ヶ浜町 伊藤千賀保健師を講師とし、絵本の読み語りを組み合わせたケース支援検討を行った。地域での関わりの難しい事例から、その人がどのような人なのか、保健師としてどのような支援を行うかを皆で考えた。その後、絵本の読み語りで、その人の考えや大切にしていることが紹介されることにより、事例を文章で読

んだだけの時と違い、その人の歴史や人生のストーリーを感じることができるという体験をした。これにより、本人が何を望むかを大切にすることや、その人の歴史を尊重する重要性への気づきが得られた。

【グループワークの感想】

- 絵本にとっても感動した。絵本を通して事例を考えることで、本人目線で支援することの大切さを改めて感じた。支援者として、“幸せを運ぶ”という意識も持てていきたいと思った。
- グループワークを行って、保健師として対象の支援をするには、やはり“本人の気持ち”を大事にしなければならぬと改めて感じる事ができた。
- ケースについて絵本を使用して客観的に考えることができ、自分の引き出しを増やせる良い機会であった。

【交流会の感想】

- 他の保健師の話を聞くことができてよかった。いつもは注意されることばかりで、自信がなくなっていたが、悩みを聞いたり言ったりすることで、勇気が湧いてきた。
- 他市町村の保健師といろいろな話ができて気持ちが楽になった。
- 自治体を超えた新任期保健師のつながりがとてもありがたいことだと思った。
- 職場ではない場所、自分の知っている場所、育った場所で仕事の話をのびのびとできる環境があるということとは素晴らしいと思った。



第8回「男性保健師の会の活動」

会津保健福祉事務所 湯田智仁保健師より、県内そして全国での男性保健師の会の活動内容についての紹介があった。全国における男性保健師の割合は約3.4%、県内では約5.5%であり、男性保健師が複数配置されている自治体は少なく、ほとんどが1名配置であるという状況の中、SNSでグループをつくり日々情報交換を行っている。先進事例の共有や、新型コロナウイルス感染症禍での業務効率化のための最新技術を応用した取り組み

の報告，男性保健師ならではの悩み相談など，交流を通して活動の向上を図りながら楽しく活動している様子が報告された。

【参加者の感想】

- 全国での先進的な活動を取り入れて，実際の業務改善に生かしていることが素晴らしいと思った。
- 全国の男性保健師とつながり，キャンプや意見交換会など，楽しく活動されていることを初めて知った。
- 同年代の保健師と関わる機会がなかなかないので，非常に有意義で楽しい時間を過ごすことができた。
- 様々な経験をされてきた方の話を聞けてよかった。現場で先輩たちが抱えている課題を深く知ることができた。
- 日々の業務の悩みを共有できた。保健師同士の横の繋がりを持つ機会となった。今後もゆるく繋がっていききたい。また定期的に集まる機会を設けてほしい。



現在までの活動の評価と課題

公衆衛生看護学研究会は，県内で活躍している保健師が職場を超えて集まる実践コミュニティとなっており，職責で参加する研修とはまた違った立場で参加することができる交流の場となっている。所属機関や県，看護協会などにおいても現任教育の機会があり，様々な機関がそれぞれの立場での研修を重層的に実施することは，保健師同士のつながりをつくり，現場の活動を活性化する上で重要であるが，本研究会は，年齢に関係なく保健師活動の原点に立ち返る場であり，世代を超えて大切なことを受け継いでいく機会の一つになっている。特に，小規模町村の新任期保健師にとっては，所属を超えて同世代で仲間を広げ，日々の保健活動への意欲を高める機会ともなっている。参加者は，研究会の中での情報交換や事例検討等を通してそれぞれの実践を見直し，日頃の活動の中で意識していることを共有し，活動のヒントを見出すなど，より効果的な活動を行うための気づきや学びの場となっている。

今後も研究会の活動を継続していくことで，大学が卒業生や県内の保健師の困ったときの相談先の一つとなり，保健師の孤立や離職を防ぐ一助としたい。参加者からは「他自治体での活動内容について知りたい」「他自治体の同じ業務担当者と交流を持ちたい」「同年代の保健師同士での困りごとの共有とそのアドバイスについて話し合いたい」等の希望がある。そのため，今後も参加者のニーズを確認しながら，世代ごとの交流やすべての世代の交流など，様々な機会を定期的に持ち，支えあいや切磋琢磨の機会として，県内の保健師の資質向上に寄与できるよう寄り添いながら，大学としての役割を果たしていきたいと考える。